島根県立看護短期大学紀要
第8巻，13－24，2003

島根県立看護短期大学
－過去と現在－

恒松徳五郎

概　　要

島根県立看護短期大学は平成7年4月1日に開学した。過去については本学周辺の歴史を振り返る。ことに古事記に記載される神話は，この地域が医療・看護の発祥の地であることを示している。さらに地域住民が健康・福祉に関していかに強い願望と熱意を持ったかを述べる。これらの歴史に誇りを持ち伝統を継承しつつ，将来は本学が拠点となり地域住民の健康·福祉の向上に貢献すべきである。現在については，本学の建学の理念・目的：1．人間愛　2．看護職の責務と探求　3．開かれた大学（地域貢献），モットー：「信頼される大学－個性と魅力に輝くために」，「楽しい，面白い，授業がよく分かる」を掲げ教職員，学生一同が力を合わせている。自己評価委員会，学生による授業評価、カリキュラム，語学看護学海外研修，家庭訪問実習，臨地実習，国試，就職・進学等の成果について述べる。特に地域社会との連携・地域貢献に力を入れている。健康・福祉に対する住民の強い願いが，本学の開学へと導いたので，それらの期待に応えるべく，信頼される大学造りに邁進しなければならない。

キーワード：出雲神話，健康福祉への祈念，建学の理念、信頼される大学，
地域貢献

Ⅰ．はじめに

島根県立看護短期大学（以下，大学）は平成7月4月1日に開学した。その際、建学の理念・目的を高く掲げた。キーワードは1．人間愛　2．看護職の責務の探求　3．開かれた大学（地域貢献）である。教職員，学生一同は，その実現に向けて邁進している。しかし近年は，大学殊に短期大学を取り巻く社会情勢には厳しいものがある。ここで本学の過去・現在を概観して本学の歩むべき方向の参考にしたい。

過去については，本学自体が古い歴史を持つものではない。しかし周辺地域の歴史殊に，古事記に記された神話を振り返ると，この地域が我が国の医学・看護の発祥の地であり，さらに，近隣には大薬師寺があり，古くから地域住民が健康・福祉に対して強い願いを持っていたと考えられる。また，近くには，出雲近代医学の始祖である西山砂保顕彰碑がある。かつてはこの地方の医学・医療のメッカであった。大学の所在地を含めた地区は出雲市が指定する「健康と福祉の里」であり，保健・医療・福祉の拠点として発展をしている。これら地域の歴史を誇りとして伝統を継承し，さらに将来に向け住民の健康・福祉の一層の向上のために貢献することこそ本学の使命と考えられる。

現在については，開学以来，常に建学の理念の基に資質のより高い看護職者育成に務めている。「信頼される大学－個性と魅力に輝くために－」，「楽しい，面白い，授業がよく分かる」をモットーとして授業の構築，学生による授業

評価、自己点検・自己評価，入学選抜試験，看護師・保健師・助産師国家試験，就職，進学等の指導を行っている。十分と言わないまでも，所期の成果をあげている。

将来については地域との連携を一層密にして相互の発展，活性化を目指さねばならない。現在の専攻科を設定専攻科に移行させること，さらには，著者の個人的見解として成る可く早い時期に4年制大学として看護教育を実施すべきとの考えている。個性と魅力に輝く”島根方式の新しい看護”の確立に向け進むことが期待される。

Ⅱ．過去：一本学を取り巻く環境一

1．地理的環境

本学は出雲市内の東北部に位置する西林木町にあり，学生寮は道路を挟んで武志町にある。市内とは言え，田園地帯でありキャンパスは田畑に囲まれている。北側約0.5kmには東西に走る北山山系があり，そこには中世の歴史に名を留める鳶巣（とびがす）城跡，麓には大寺古墳，大寺薬師を安置する万福寺がある。南には，八俣の大蛇（やまたのおろち）の神話で知られれる斐伊川，東には宍道湖がある。西には日本海の海岸，出雲大社がある。美しい自然環境に恵まれている一方で，この地域では健康と福祉に関する輝かしい歴史が展開されたのである。

2．神話が物語る医療・看護の発祥

出雲大社はキャンパスの西約8km（簸川郡大社町）にある。出雲市と大社町は異なる地方自治体であるが，出雲国風土記[1]によると，本学のある西林木町（伊努郷　いぬのさと）と大社町（杵築郷　きずきのさと）は共に出雲国の出雲郡（いずものこほり）にあり，2つの郷は隣接していた。大社町にある出雲大社の本殿には大国主命（神）（おおくにぬしのみこと），そして天前社（あまさきのやしろ）（瑞垣内の東側）には蚶貝比売命（姫）（さきがいひめのみこと），蛤貝比売命（姫）（うむがいひめのみこと）が祭られている[2]。

大国主命は（以下，「みこと」）は国譲り，縁結び，幸運，農耕の神として知られている。さらに医療の神であることは、古事記上巻[3][4]の神話「稲羽（因幡，いなば）の白兎（いなばのしろうさぎ）」に基づいている。

蚶貝比売命(姫)及び蛤貝比売命(姫)は（それぞれ「あかがいひめ」及び「はまぐりひめ」として知られている），医療殊に看護の神であることは「手間山の赤猪（てまやまのあかいのししし）」で示されている。それらの神々が出雲大社に祭られていることはこの地域が医療・看護の発祥であることを寓話的に物語っている。

古事記に記された神話を紹介する。近年，神話を知る若い世代が少ないので，それらの概略を述べ参考とする。

神話1．：「稲羽（因幡）の白兎（いなばのしろうさぎ）」

隠岐の島から対岸の本土に帰りたい白兎が海上に並んだ“わにさめ（鮫）”を欺き海上に並ばせて，その背中の上を飛んで渡り終えた瞬間に捕らえられ，背中の毛を剥ぎ取られ稲羽（因幡）の海岸で苦しんでいた。「みこと」の兄たちである八十神（やそかみ）の教えに従って海水で身を洗い日光浴をした。症状は悪化し，その激しい苦痛で泣いていた。その時，通りかかった「みこと」は事情を聞いて治療法を指示した。先ず真水でよく洗い，蒲の穂（がまのほ）を集めて其れをほぐし，地面に敷きその上を転げ回るように教えた。指示に従ったところ，兎は元の美しい姿になった。この神話は「みこと」が医療に造詣が深く，広く出雲地域の人々のために医療，ひいては，健康・福祉の向上に活躍されていたことを物語っている。医療の神として出雲大社の祭神として尊敬され，この地域が医療発祥の地と言われる所以である。

神話2．：「手間山の赤猪（てまやまのあかいのしし）」は次の如くである。「みこと」が稲羽（因幡）の国（鳥取県東部の昔の国名）に出かけたのは，兄たち（八十神）がその地の八上姫（やがみひめ）に求婚する旅に同伴し兄たちの荷物を運搬するためであった。八上姫は八十神を敬遠し，「みこと」に好意を寄せた。其れを妬んだ八十神は悪巧みを実行した。伯耆の国（鳥取県西部の昔の国名）の手間山の麓に来

たとき，この山に赤い猪がいるので捕らえるように「みこと」に命令した。八十神は山上で真っ赤に焼いた大石を転がし落とした。其れを抱き留めた「みこと」は重篤な火傷を受け仮死状態に陥った。これを知った母は驚いて高天原（たかまがはら）の女神（かみむすびのかみ）に報告した。これを不憫に思い蚶貝姫及び蛤貝姫を差し向けて救護に当たらせた。蚶貝姫は赤貝を焼いて粉にし，蛤貝姫はこれを蛤（はまぐり）の汁でといて薬として，「みこと」の全身に塗布した。この治療やその後の，姫達の看護で「みこと」は見事に蘇生し，元の立派な体に回復した。この神話は古代に民間療法として火傷の治療が行われていたことを示している。蚶貝姫（さきがいひめ），蛤貝姫（うむがいひめ）が出雲大社の天前社に祭神として崇拝されている。この地が医学と共に看護の発祥の地であると考えられる所以である。

3．地域住民の健康・福祉への祈願

1）大寺薬師[5]　本学のある出雲市西林木町に隣接する東林木町には万福寺があり，その境内には一般に大寺薬師の名で知られる仏像が安置されている。それらは薬師如来座像，日光菩薩立像，月光菩薩立像，観音菩薩立像二躯，四天王立像（広目天，持国天，増長天，多聞天）であり，約千年前の作と言われ，国の重要文化財に指定されている。また，鎌倉時代作とされる十二神将の木像（一体は大正時代に補充）もある。「大寺」は推古天皇２年（594）に知春上人によって建立されたと伝えられている。今の万福寺の数百メートル北の山側にあったが，災害のため仏像その他が現在地に移されたと言われている。何故，そして何時，このような立派な多数の仏像がこの地に安置されたのかは，学問的検証が殆どないので不明である。著者は想像の域を出ないが次の如く考えている。薬師如来は病苦などに苦しむ人々（衆生）を救うという仏であり，一般には右手は施無畏（せむい）印を結び，左手は薬壺を持っている。日光・月光両菩薩を脇侍（きょうじ）とし，十二神将に取り囲まれている。薬師如来は単に医薬の仏でなく，広く健康と福祉の仏として篤い信仰を得たのである。古くからこの地域では住民の健康・福祉を求める祈願の念が強く，其れが薬師如来の建立，安置という大事業をこの地で実現させたものもと思っている。

2）西山砂保：出雲近代医学の始祖[6]

出雲市荻杼町（おぎとちちょう）（以前は荻原村）は本学のある西林木町から稲岡町または武志町を隔てた所にある。ここには西山家墓地があり，「西山砂保顕彰碑」が建立されている。西山砂保（1781-1839）は出雲近代医学の始祖である。足跡を紹介すると次の如くである。19歳で京都で古方医学を学び，次いで紀州（和歌山）へ行き，文化８年（1811），30歳で華岡青州の門に入る。青州は文化２年，世界で初めて自らの手で作った麻酔薬（まふつさん麻沸散：主成分はチョウセンアサガオの種子とトリカブトの根[7]）を用いて，全身麻酔による乳癌手術に成功した。西山砂保は青州の指導の下で麻酔薬の作り方，投与法，癌その他の手術術式を研修・習熟して医師としての大きい自信を得た。その頃，シーボルト（1796-1866）がオランダ長崎商館の医師として来日し，鳴滝塾を設けて医学，博物学を教授し，高野長英，湊長安らの俊英を育てた。砂保は文政８年（1825），44歳で最新の西洋医学を学ぶため，シーボルトの高弟湊長安を頼って長崎留学の途についた。文政９年（1826），シーボルトから修業証が授与された。翌年，荻原村に帰り医院を開設した。彼の名声はたちまち近隣に鳴り渡り，治療を求める患者や最新医学の教えを願う医師や若者が門前に市をなす賑わいとなった。西山砂保の卓越した能力と共に地域住民の深い健康福祉への願いと理解・支援があったからこそと思われる。まさに荻原村は近代医学のメッカの観を呈した。平成７年，本学の開学を記念して国際ロータリー第2690地区出雲ロータリークラブより，「出雲近代医学の始祖西山砂保とシーボルト」，「華岡青州が西山砂保に宛てた礼状」その他を示す額２枚の寄贈を受けた。本学図書館前に展示して顕彰している。なお，本学学生寮の前庭に「ナースの水辺」は先の出雲ロータリーの寄贈によるものである。地域の人々が本学に大きい期待を

寄せていることがうかがえる。本学の位置する地域が近代医学のメッカであったことは特筆すべきである。

3）出雲市の「健康と福祉の里」：健康文化都市の拠点[8) 9)]

平成5年5月，出雲地域広域市町村圏事務組合は出雲地方拠点都市地域基本計画を公表した。5つの拠点地区を設定した。その一つに「出雲保健・医療・福祉拠点地区（出雲市）」（健康と福祉の里）がある。平成7年4月，開学予定の本学を核として，福祉ボランティアセンター，老人福祉施設等を整備することにより，保健医療福祉拠点として位置付けられた。この地区と，県立中央病院（医療実践拠点）及び健康公園「出雲ドーム」（健康づくり拠点）との有機的な連携を図りながら，これらの3地点を結ぶ三角地帯を拠点として地域の保健・医療・福祉の集積ゾーンとして形成する予定が立てられた。「健康と福祉の里」は本学を含めた10haの広さである。現在，その中には本学，福祉施設のハートピア出雲，出雲健康温泉及びスパーク出雲が設置されている。出雲市その周辺自治体及びそれらの住民が心に抱く健康と福祉への強い願いが「健康と福祉の里」を実現したと思われる。健康文化都市を目指す出雲市にとって本学の果たすべき中心的役割が理解される。

Ⅲ．現在：ー建学の理念のもとに教育のモットー：「信頼される大学」，「楽しい，面白い，授業がよく分かる」の具現を目指してー

島根県には高等教育機関としては島根大学，島根医科大学，島根県立島根女子短期大学，島根県立国際短期大学（平成13年4月廃校，現在は島根県立大学）があった。看護教育は専門学校で行われていたが，看護職者の著しい不足があること，さらには資質のより高い人材が必要のため大学教育が求められていた。平成7年4月，本学が開学し，それに後れて平成10年4月，島根医科大学に看護学科が設立された。

1．本学の開学

平成3年1月，島根県立高等教育機関整備構想検討委員会は出雲地域には組合立短期大学を設置することが適当であるとの検討結果を報告した。同年8月，組合立大学設置検討委員会は同地域に於ける短期大学設置に関する報告書を提出し，設置可能な学科として看護学科，専攻科（地域保健学専攻，助産学専攻等）を提示した。県知事の基本方針に続いて，平成4年9月，島根県立看護短期大学（仮称）設置基本構想が発表され，県立短期大学設立準備委員会の検討を経て，建学の理念，教育内容，教育目標等に関する基本的事項の骨格が示された。

平成7年4月1日，島根県立看護短期大学が開学した。なお，既存の島根県立総合看護学院は発展的に閉校することが決まった。開学に際しては，建学の理念・教育の目標を高らかに宣言して，その具現に向けて教職員，新たに入学する学生一同が力を合わせて邁進することを誓った。平成10年4月，専攻科　地域看護学専攻，助産学専攻が設置された。

建学の理念[10)]は「深く専門の学芸を教授研究し，人間性及び創造性豊かな看護職者を育成すると共に，生涯学習の機会を提供し，もって地域の人々の健康，福祉の向上に寄与する」とした。根底に流れる哲学を簡潔なキーワードで示すと，「人間愛」，「看護職の責務の探求」，「開かれた大学（地域貢献）」である。（表1）

2．自己点検，自己評価

平成3年6月に改正された短期大学設置基準[11)]は，その総則の第二条に自己評価等について次の如く定めている。「短期大学は，その教育研究水準の向上を図り，当該短期大学の目的及び社会的使命を達成するため，当該短期大学に於ける教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行うことに努めなければならない。2．前項の点検及び評価を行うに当たっては，同項の趣旨に即し適切な項目を設定するとともに，適当な体制を整えて行うものとする。」とされている。

本学では，開学当初から上記設置基準の趣旨に即して適切な体制を整え，かつ適切な項目を

表１　島根県立看護短期大学の建学の理念及び教育の目的

１．建学の理念・目的

本学は，教育基本法（昭和22年法律第25号）の精神，学校教育法（昭和22年法律第26号）第69条の２の趣旨に測り，「深く専門の学芸を教授研究し，人間性及び創造性豊かな看護職者を育成するとともに，生涯学習の機会を提供し，もって地域の人々の健康，福祉の向上に寄与すること」を建学の目的とており，これの基になる理念は次のとおりである。

ア．深い人間愛を基に，看護職を志す人々が人間形成を追求しながら，専門職としての知識，技術及び態度を統合して主体的にものごとを捉え，創造的に思考し，そして実践することのできる能力を習得させる。

イ．変化する社会の現状と将来を，国内のみならず国際的な広い視点にも立って捉えながら，看護職が公共の福祉を目指してどのような責務を果たすべきかを追求していく。

ウ．教育と研究の成果を地域に還元することによって，「開かれた大学」として地域社会の発展に貢献する。

２．教育の目的

建学の理念・目的のもとに，教育上の目的を次の点に置く。

ア．幅広い教養を身につけ，生命の尊厳と人々に備わった固有の権利を尊重する倫理的判断力をもった看護職者を育成する。

イ．変化し，多様化する社会の看護ニーズに対応できる能力を養う。

ウ．高齢化社会の人々の保健・医療・福祉を支える制度を総合的に理解し，看護専門職者としての実践及び調整能力を養う。

設定した。本学教授会運営規定等第８条第２項[12]に基づき，教授会の下に常任委員会として５委員会を設け，その一つを自己評価委員会として体制を整えた。委員は学長，学生部長，教授会で選任された教員４名，事務局長計７名である。自己評価委員会にはワーキンググループを設けその第一ワーキンググループが自己点検・自己評価に関する事項を所掌するとした。自己評価委員会では，本学の活動状態をまとめ，年度ごとに「年報」[13)-19)]を刊行し，４年ごとに「自己点検・自己評価報告書」を発行する計画を立てた。平成12年９月，「自己点検・自己評価報告書Ⅰ　信頼される大学～個性と魅力に輝くために～」[20]を公表した。自己点検，自己評価報告書の項目には本学建学の理念・目的を採り上げて，第１章：人間愛を基にした人間形成，第２章：看護職の責務の探求，第３章：開かれた大学　とした。平成７年４月開学以来，自らの自覚と責任において実施した教育，研究，運営を振り返り，将来のさらなる発展を目指す覚悟を新にした。現在，自己点検・自己評価は学内に留まっているが，将来は第３者機関の評価が求められる。

３．本学を取り巻く社会環境と課題への対応：本学の魅力づくり

教育の特色付け

１）本学教育の基本姿勢としての「信頼される大学～個性と魅力に輝くために～」，「楽しい，面白い，授業がよく分かる」をモットーとした[21]。

我が国の社会的状況は大学殊に短期大学にとって厳しいものがある。それらを列挙すると，①少子・高齢化社会の進行，②18歳人口の減少，③多様で新しい価値観，ライフスタイルの出現（社会進出，晩婚など），④高学歴・高資格取得志向（４年制大学志向），⑤看護系の大学の急増（大学間競争の激化），⑥社会人入学希望者の急増，⑦生涯学習意欲の高揚，⑧若者の都市生活願望（親離れ）がある一方で郷土への愛着心，⑨看護ニーズの拡大と多様化，一方で，看護職者需給の均衡化　等である。これらの要因が本学への応募者の数や質に影響を及ぼしている。

本学の課題として，いかに適性のある人を確保するか，円滑な教育，研究活動，運営を行ううために必要な措置は何であるかである。

先に述べた課題対応の視点として，本学の魅力づくりを重視し，①教育の特色付け，②進路対策の充実，③開かれた大学としての地域貢献を重視している。

（１）カリキュラム，シラバスの充実

平成８年８月２日，文部省，厚生省により保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の一部を改正する省令が交付された。其れを受けて，本学では開学時からのカリキュラム[22]を改正した[23) 24)]。改訂時の主な点は，本学の開学の理念，

目的をより明確化させたこと，全科目を有機的に統合させたこと，看護に対する時代のニーズによりよく適合させたこと，学生の学問的興味を喚起し，島根県及び周辺地域の理解を促したこと，さらに，個人が持つ特徴を伸ばすことであった。一般基礎科目に「環日本海の歴史」，「島根の自然，風土，歴史」を設定した。いずれも選択科目であるが，島根県に対する深い認識と理解に役立てている。専門教育での特徴として，島根県が65歳以上の人口の割合が日本一であることから老年看護学を重視し，講義及び臨地実習の単位の増加を行った。シラバスは開学当時から作成しており，各年度の「学習のてびき」に掲載しているが，毎年，改善を加えて学生の勉強の指針としている。看護学科（3年課程）を卒業すると学生は多岐に亘る進路を取る。中でも本学の専攻科（地域看護学専攻，助産学専攻）への進学を選択する者が多い。その点を配慮して看護学科と専攻科とが一貫性のある教育とした。

（2）学生による授業評価

先に述べた自己評価委員会の所掌事項の1つとして「学生の意見を求めて教育の改善を行うこと」がある。大学の使命の第一は教育であり，日々の授業を充実し魅力あるものに改善する努力は極めて重要である。そのためには教える者と学ぶ者の双方からの評価が重要である。本学では，学生による授業評価を全学挙げて取り組んでいる。

開学時の平成7年度は教員各自の方法で，平成8年以降は「学生の授業への満足度調査」のアンケート用紙を作成し全授業科目について実施するようにした。学期末最後の授業または該当科目の定期試験終了時にアンケート用紙を配り記入して貰う。共通質問20項目と科目担当教官が作成する特別質問5項目からなり，各項目について5段階評価をマークさせる。光学文字読み取り装置で読み取らせてその入力情報を表計算ソフト・エクセルで集計する。単純集計をそのままグラフ化が出来て授業評価の概略を知ることが出来る。評価結果はそれぞれの担当教員に知らせる。全教員の評価を総合した結果を参考にして各教員が自己の授業を反省して教育方法の改善に役立てている。「楽しい，面白い，授業がよく分かる」のモットーを具現する努力であり，その詳細は本学の年報に報告している[13)-19)]。

（3）家庭訪問実習及び臨地実習

看護基礎教育の初期に行う基礎看護実習Ⅰ（1年次後期）においては，大学周辺（出雲市東林木町及び西林木町）の家庭を訪問し，人々との出会い，ふれあいの早期体験を行わせている。面接を通して看護に対するニーズを学びさらに看護を広い視野で学ぶことが出来る。家庭に於いても大変喜ばれており，さらに地域住民の教育に対する絶大な理解と協力が得られている。本学を特徴づける科目の1つである[25)]。

臨地実習施設としては島根県立中央病院，島根医科大学，島根県立湖陵病院，社会福祉施設（特別養護老人ホーム），出雲市などの行政機関，訪問看護ステーション　等がある。いずれも優れた施設，設備，指導者を備えている。県立中央病院は近年，電子カルテシステムを導入し先進的な医療を実施している[26)]。

（4）情報ネットワークシステムと情報科学教育の充実

開学時，「情報と映像で世界と地域を結ぶ島根県立看護短期大学の2つのネットワーク」を構築した[27)]。これは「コンピュータ情報ネットワーク」と「音声・映像情報ネットワーク」である。前者として，研究用パソコンを学長室，教員研究室，共同研究室等に，学生開放パソコンを情報総合演習室，図書館，ラウンジ，学生寮に配備し，5つのサーバー（インターネット，コミュニケーション，教育管理システム，図書管理システム，論文検索システム）と連結し学内ＬＡＮを構成している。後者としてビデオ・カセット・レコーダを教育用として講義室，演習室，実習室に，研究用として学長室，教員研究室，共同研究室に，学生開放用として図書館に，会議用として大会議室その他に配備した。大講義室には120インチスクリーン，中講義室には100インチスクリーンを備えた。学内行事を撮影した映像を上記の各部屋並びに出雲ケーブルビジョンを通して市内に各家庭に送信することが出来る。その際には双方向も送信が可能

である。学内での情報学教育と共に，テレビ会議システムも導入し，県内の教育施設（石見高等看護学院その他）との遠隔授業を実施している。また，海外（ワシントン州ワナチ・バレイ大学)との国際遠隔授業を検討・試行している[28]。

（5）語学･看護学海外研修

我が国では，国際化が国，県，市町村などの各レベル，さらに各家庭・個人レベルで進んでいる。島根県に於いても，開かれた地域社会づくりと国際社会を担う人材の育成など，国レベルでは出来ないきめ細かい国際貢献，地域での交流，日本への理解の増進に取り組んでいる。看護職者にとっても国際性の涵養が求められるところであり，外国語の基礎知識，海外での最新の医療･看護状況の学習も不可欠となってきた。本学では看護学理論の構築及びその実践面に於いて，島根県固有の文化を根底に据え，さらに世界各国の看護の長所を取り入れた新しい“島根方式の看護学理論”を樹立して時代のニーズ，地域さらには世界のニーズに応えたいと考えている。そのために大学間協定に基づいた国際交流が重要と考え，実施している。平成８年度（開学２年目）に語学看護学海外研修制度を発足させた。教員２名（団長と副団長）と学生（20－25名）が夏季休業中に米国ワシントン州ワナチ・バレー大学に，次年度からはワナチ・バレー大学とシアトル大学の看護学部の両大学で約３週間滞在し語学（英語）と看護学の研修を受けさせている。研修期間中には新しい文化との出会い，英語を使ってのコミュニケーション，アメリカ人家庭でのホームステイ，英語学習、野外レクリエーション，病院，診療所，高齢者施設の見学，看護学の講義など魅力あるプログラムを体験している。この研修がいかに素晴らしいかは，研修後に発行される「太平洋を渡った夏」[29)-35)]に感動をもって書かれている。参加した教員もそれぞれ感動を報告している[36)37)]。なお，この研修の参加者には授業科目「英語特論」（選択）１単位が与えられる。

４．社会の要請に応えて：進路対策の充実

１）国家試験

看護師，保健師，助産師国家試験に合格することは看護専門職者にとっての第一歩である。また，本学が「信頼される大学―個性と魅力に輝くために」を具現する第一歩として100％の合格率を確保することが重要である。そのためにはカリキュラムの充実，学生による授業評価，魅力ある授業を目指す教員の不断の努力及び学生の学習欲と熱意である。既述の如く，本学のカリキュラムは建学の理念・目的を十分に反映させ，そして時代のニーズに適応するものとし，そして国家試験出題基準に照らして，看護師，保健師，及び助産師として必要な最低限の知識･技術を網羅するように配慮した。教員並びに学生の努力により，本学の国家試験合格率は全国の其れを上回る好成績を得ている。なお，平成12年は看護学科，平成13年は看護学科，地域保健専攻，助産学専攻の合格率はいずれも100％であった。

２）入学，就職，編入学，進学[13)-19)]

看護学科の定員は80名であり，入学試験は一般選抜試験(定員50名)，推薦入学試験(30名)，社会人特別選抜試験（若干名)，外国人特別選抜試験（若干名）である。一般選抜試験の志願倍率（受験倍率）は平成11年，12年，13年でそれぞれ6.6(5.9)，7.0(6.0)，7.1(6.6)であり年々，高くなる傾向がある。出身地別に見ると，平成13年は県内69名，県外15名，外国１名(計85名)である。県内の出身高校別では出雲地区45名，石見地区22名，隠岐地区２名である。専攻科の入学試験は一般選抜試験，推薦入学，社会人特別選抜からなり，定員は地域看護学専攻科は30名，助産学専攻は15名である。地域看護学専攻の志願倍率（受験倍率）は平成11年、12年、13年はそれぞれ5.8(5.6)，5.3(5.2)，4.8(4.6)でやや減少の傾向を示し，助産学科では3.9(3.9)，3.3(3.3)，3.4(3.4)で同様の傾向を示した。平成13年の進路状況を見ると看護学科の卒業生76名のうち，就職54名，進学21名，その他１名であった。就職の内訳を見ると，島根県内の病院，診療所37名，県外17名であった。専攻科修了生は地域看護学専攻30名であり，29名が就職した。そのうち11人が島根県内であった。助産学専攻は15名であり，14名が就職した。そのうち７名

が島根県内であった。

本学看護学科入学生の多くは島根県内の高校卒業生である。専攻科　地域学専攻，助産学専攻共に入学生の約半数が島根県出身である。看護学科卒業生の多くが，専攻科地域看護専攻，助産学専攻修了生の半数近くが島根県内に就職し，本学の建学の理念である地域貢献殊に地域医療・看護の向上に貢献していることを示している。

3）開かれた大学（地域貢献）殊に出雲市及び公民館との連携

開かれた大学（地域貢献）は本学建学の理念・目的の重要な柱の一つである。島根県立看護短期大学学則第12章47条は地域開放事業について次の如く定めている。「本学は，看護職者に対する継続教育，及び生涯学習の場としての役割と機能を果たすため，専門知識，技術等を習得させるための研修事業，図書館情報の公開，公開講座，講演会その他の地域開放事業を行うことが出来る。」この趣旨に沿うべく公開講座テーマ「まめに暮らしていくために」の実施，公民館事業との連携による地域住民のための生涯学習，健康教室等，社会人を対象とした科目等履修生の入学許可，看護・福祉・保健関連職者のための情報センターとして図書館の開放を行っている。

大学審議会によると21世紀に於ける大学の役割は「知」の創造とその活用であると述べており，そのために産官学の連携の重要性が指摘されている。今後はますます企業，地方自治体，大学等と特定の目的を共有して協力して共同事業，研究を実施して相互に利益を得る体制を整える必要がある。

本学は既述の如く，「健康と福祉の里」の地区内にある。キャンパス内には，出雲市の掘削による温泉源があり，その好意によって本学学生寮に給湯されている（大学温泉）。「温泉のある大学，学生寮」は全国でも珍しい。泉質はナトリウム－塩化物・炭酸水素塩泉（低張性・アルカリ性・低温泉）である。「将来，住民の健康，医療の担い手である学生に，健康な学園生活を送って欲しい。」という出雲市の思いが込められている。大学キャンパス周辺には北山健康温泉，スパーク出雲，ハートピア出雲など温泉，運動，身体障害者に対する福祉施設が建設され，健康と福祉の里にふさわしい様相が整ってきた。本学がそれらとの密接な連携のもとに今後，ますます，「住民のすべてに健康と福祉」を目指して活動することが求められる。

Ⅳ．むすび

本学は出雲市西林木町にある。古くは出雲国，出雲郷でありそこには出雲大社のある大社町も含まれていた。出雲大社の祭神である大国主命，きさがい姫，うむぎ姫の神話はこの地が医療・看護発祥の地であることを物語っている。大寺薬師の建立・安置は遠い過去における住民の健康・福祉への強い祈念の現れと理解される。また，出雲に於ける近代医学の始祖である西山砂保が活躍した場でもある。本人の優れた医学的知識技術と共に病める人への深い情愛を感ずるともに，地域の人々が西山砂保に惜しみない理解と支援を提供したものと思っている。

本学は出雲市の「健康と福祉の里」にある。健康・福祉の向上・推進に対する市民の期待には大きいものがある。これらの歴史に誇りを持ちその伝統を継承する一方，本学を拠点として地域住民の福祉，健康の向上の発展に寄与せねばならない。

本学開学以来の教育研究及び管理運営に触れさらに本学を取り巻く社会環境と課題の対応としての本学の魅力づくりを述べた。建学の理念：1．人間愛　2.看護職の責務の探求　3．地域貢献（開かれた大学）のもとに教育のモットー：「信頼される大学－個性と魅力に輝くために－」「楽しい，面白い，授業がよく分かる」の具現に向けて邁進している。カリキュラムの充実，学生による授業評価，家庭訪問実習及び臨地実習，情報ネットワークシステムと情報学教育の充実，国際交流についても概説した。社会の要請に応えて，進路対策の充実に力を入れている。入学試験，国家試験，進学，編入試験，就職について述べた。「信頼される大学」が一歩一歩，着実に実現されている。

短大を取り巻く厳しい情勢下にあって今後，本学はいかに歩むべきか重要な課題である。本学の過去の歴史を振り返ると，地域には健康と福祉に関しての輝かしい伝統がある。これらを尊重しながら新しいステップを歩み出さねばならない。開学以来から今日を振り返るとき，地域の人々から多くの支援を得ている。これからも本学は地域と共に歩み，住民の方々の健康，福祉の向上を目標としてより質の高い看護―新しい島根方式の看護学―の確立が求められる。さらに，社会的要請として資質の一般と高い看護者職者の育成が強く求められよう。専攻科（地域看護専攻，助産学専攻）を一段とレベルアップさせ，認定専攻科に，さらには看護学科，専攻科を含めた4年制大学への発展に向けての前進が期待される。

謝　辞

建学の理念に基づいて教育，研究及び運営に活躍する本学の教職員一同に心から感謝いたします。近隣地域の方々，出雲市民，島根県民の皆様の御好意にお礼申し上げます。

文　献

1）加藤義成：出雲国風土記，今井書店，1998.
2）出雲大社由緒略記，出雲大社社務所，2001.
3）古事記(上巻)，校注　日本文学大系，国民図書株式会社第1巻，1928.
4）錦織好孝：出雲の神話ガイドブック，渡部印刷株式会社，1998.
5）出雲大寺薬師（パンフレット）　大寺薬師奉賛会(鳶巣公民館内)
6）占部忠治：出雲近代医学に始祖「西山砂保」考「大社の史話」第百号，62-72，1994.
7）梅棹忠夫，金田一晴彦，阪倉篤義，日野原重明監修：講談社[カラー版]日本語大辞典，講談社，1992.
8）出雲市拠点都市地域　基本計画　出雲地区広域市町村圏事務組合，1997.
9）出雲・宍道湖・中海地方拠点都市地域，基本計画，出雲・宍道湖・中海地方拠点都市地域整備推進協議会，1997.
10）平成7年度，平成10年度　学習のてびき，島根県立看護短期大学，1995，1998.
11）短期大学設置基準，昭和50年4月28日文部省令21号，最終改正，平成3・6・3分令28，大学設置審査要覧(平成4年改訂)，文部省高等教育局企画課監修，1992.
12）規程集，平成12年10月，島根県立看護短期大学，2000.
13）平成7年度，April 1995-March 1996，年報 Annual Report，島根県立看護短期大学，1996.
14）平成8年度，April 1996-March 1997，年報 Annual Report，島根県立看護短期大学，1997.
15）平成9年度，April 1997-March 1998，年報 Annual Report，島根県立看護短期大学，1998.
16）平成10年度，April 1998-March 1999，年報 Annual Report，島根県立看護短期大学，1999.
17）平成11年度，April 1999-March 2000，年報 Annual Report，島根県立看護短期大学，2000.
18）平成12年度，April 2000-March 2001，年報 Annual Report，島根県立看護短期大学，2001.
19）平成13年度，April 2001-March 2002，年報 Annual Report，島根県立看護短期大学，2002.
20）自己評価・評価報告書Ⅰ　信頼される大学～個性と魅力を磨くために～，島根県立看護短期大学，2000.
21）T.Tsunematsu: Shimane Nursing College: Its Present and Future-To be a socially responsible college with uniqueness and appeal, Bulletin of Shimane Nursing College, 6, 61-72, 2001.
22）平成7年度　学習のてびき，島根県立看護短期大学，1995.
23）平成10年度　学習のてびき，島根県立看護短期大学，1998.
24）T.Tsunematsu: Revised Curriculum of Nursing

Course in Shimane Nursing College, Bulletin of Shimane Nursing College, 4, 43-63, 1999.

25) 長崎雅子，吉川洋子，曽田陽子，若林由佳：家庭訪問実習の満足度要因の分析－学生と訪問対象者のアンケート調査より，島根県立看護短期大学紀要，第5巻，35-40，2000.

26) 瀬戸山元一，清水史郎，沖一，電子カルテシステムの構築，新医療，第24巻，40-43，1999.

27) 恒松徳五郎他：島根県立看護短期大学の地域貢献と情報ネットワークシステム，島根県立看護短期大学紀要，1，65-72，1996.

28) 江角弘道，飯塚雄一，吉川洋子：テレビ会議システムによる国際遠隔授業の研究，島根県立看護短期大学紀要，6，73-78，2000.

29) 太平洋を渡った夏，1996年度語学・看護学海外研修報告，島根県立看護短期大学，1996.

30) 太平洋を渡った夏2，1997年度語学・看護学海外研修報告，島根県立看護短期大学，1997.

31) 太平洋を渡った夏3，1998年度語学・看護学海外研修報告，島根県立看護短期大学，1998.

32) 太平洋を渡った夏4，1999年度語学・看護学海外研修報告，島根県立看護短期大学，1999.

33) 太平洋を渡った夏5，2000年度語学・看護学海外研修報告，島根県立看護短期大学，2000.

34) 太平洋を渡った夏6，2001年度語学・看護学海外研修報告，島根県立看護短期大学，2001.

35) 太平洋を渡った夏7，2002年度語学・看護学海外研修報告，島根県立看護短期大学，2002.

36) 曽田陽子，飯塚雄一：短期海外研修における異文化体験,島根県立看護短期大学紀要，第5巻，51-58，2000.

37) Yoko Yoshikawa:A Report on Short-Term Study-abroad of English and Nursing-Participation in the Summer Programs held in 1997, at Wenatchee Valley College and the School of Nursing, Seattle University, Bulletin of Shimane Nursing Collge, 4, 107-114, 1999.

Shimane Nursing College: Past and Present

Tokugoro TSUNEMATSU

Abstract

Shimane Nursing College opened in April of 1995 in an area especially rich with health and welfare from the ancient times. According to myths in the Kojiki, the area has been regarded as the birthplace of medicine and nursing in Japan. There are statues of Yakushi (Bhaisajyaguru) popularly named Ootera-yakushi-nyorai, and other Buddhas in a nearby temple which were scluptured in the old times and most of them are now designated as national cultural assets. These were, in my opinion, established based upon people's sincere prayer for their health and welfare.

In the end of the Edo Era, there lived in this area a doctor named Nishiyama Sunaho. He has been respected as a founder of modern medicine in Izumo. About ten years ago, Izumo City designated this area as "Town Home of Health and Welfare" with an expectation that this college would be a foothold of people's well-being.

From the begining to the present, education and research activities have been successfully carried out to realize the Ideals and Objectives of Education at Shimane Nursing College.

Key words and phrases : Myths of the Kojiki, birthplace of medicine and nursing, Izumo area, Ideal and Objectives of the College